

# Millon の人格障害構造仮説にかかわる 10 PesT に関する研究

中 澤 清

問 題

われわれは 2003 年から人格障害をモデルにした 10 PesT の開発を行い、それを用いて人格障害心性のいくつかは年齢が高くなるにつれ先鋭化することを示し（中澤, 2004, 2005）, 「こころの生活習慣病」を提唱した。

ところで人格障害をモデルにした人格理論には Millon, T. や Cloninger, C. R. の理論がある。Millon (1969) は生物社会—学習論的見地から人格障害の研究を続け、DSM-III の策定に当たっては大きな力となった。しかし DSM-IV では削除された人格障害を含み、彼の理論には科学性より、経験による恣意性が認められることを強調する意見も見られる (Widiger, 1985)。彼が主張する人格障害理論は、人格障害を行動パターンから積極性 (activity)—消極性 (passivity) 次元に分け、さらに依存、独立、両価、離反 (detached) という対人関係を設定して、8 類型の基本精神病理パターンを仮定している。なお Millon は 1990 年以降この理論を再評価し、医学的、化学的、生物学的見地から進化発生学的モデルを提唱している (Millon, 1990)。

Cloninger (1987) の人格モデルは神経化学的行動モデルに基づくものであり、ドーパミン系、セロトニン系、アドレナリン系神経に基礎を置く行動系が根拠になっている。パーソナリティ理論に生化学的視点から気質という 4 つの遺伝的規定因を取り入れ、3 つの性格との関連から人格障害を説明している。

表 1 Millon の積極－消極 対 独立－依存次元

対人関係	行動パターン	
	消極的	積極的
依 存 的	服従的 (Submissive) 人格 依存的人格障害	社交的 (gregarious) 人格 演技性人格障害
独 立 的	自己愛的 (Narcissistic) 人格 自己愛性人格障害	攻撃的 (Aggressive) 人格 反社会性人格障害

上段が Millon の呼称，下段が DSM-IV による障害名

小出浩之（2003）は Millon の理論に基づいて，人格障害臨床像間の重複を人格障害の相互関係で示した。彼は能動－受動の軸と独立－依存の軸で構成する象限の中心に人格境界性人格障害を据えた。そして象限のどこかに位置する人格障害が，さまざまな要因によって特有の行動パターンを示すことが困難になった時に，他の人格障害に移行する可能性を示唆している。たとえば依存的対象があり，受動的な生活が許される環境にあれば依存性人格障害として行動する。しかし依存的対象が去ってしまい，自分の判断で生活しなければならない状況になると境界性人格障害へと病像が変化していくという。

小出に従って Millon 理論から能動（積極性）対独立（独立性）の位置関係を表にしたものが表 1 である。人格障害モデル尺度作成に携わる者として，このような積極性・独立性という 2 軸構造が人格障害に存在し，それが人格障害だけのものなのか，人格障害心性にも存在するのか興味をそそられる。本研究では，そのような構造内での病像移行が存在するのかを確認する前に，10 PesT を用いて人格障害心性にも Millon の構造仮説が存在するのか確かめてみる。

方                  法

10 PesT について

われわれは DSM-IV に忠実に従ったパーソナリティ検査を開発し，10 種の

パーソナリティ・スタイルを測定しているということで、10 PesT と名付けられた。10 PesT の下位尺度項目名は DSM-IV に基づいて、妄想性、分裂質性、分裂性、反社会性、境界性、演技性、自己愛性、回避性、依存性、強迫性とした。各下位尺度項目数は境界性と強迫性は各 11 項目、他の 8 尺度は各 10 項目で合計 102 項目（下位尺度間に重複する項目があるので項目数は 100 である）あり、回答は「はい」「いいえ」の他「多分」という推測を含む選択肢を加えた 3 件法である。昨年の研究（中澤，2004）では 10 PesT の下位尺度の Cronbach の  $\alpha$  係数は、男性で .7 台が 1 尺度、.6 台が 4 尺度で、他は .5 台であった。女性では .7 を越えたものが 1 尺度、.6 台が 8 尺度、.5 台が 1 尺度であった。

しかしその後幅広い年齢層の被験者から資料を得て、それを分析すると、年齢が高くなるにつれ十分な  $\alpha$  係数が得られる下位尺度のあることがことがわかった（中澤 2005）。つまり若いときには多彩なタイプの人格障害心性を示すが、歳を経るにつれ特定の人格障害心性に偏ってくる人格障害心性があると考察されたのである。

### 積極・独立尺度について

積極性－消極性と独立－依存を査定するために新たに尺度を作成した。尺度はそれぞれの概念を表現する項目を各 11 項目用意し、その意図をごまかすための埋め草項目 9 項目を加え 31 項目の尺度を作成した。回答は「全くそうだ」「そうだ」「そうかもしれない」「違うかもしれない」「違う」「全く違う」の 6 件法で行った。手続きに示すような方法で精緻化を行った。

### 手続き

10 PesT と積極・独立尺度を 209 人（男性 65 名、女性 144 名、平均年齢 20.5 歳）の大学生に集団施行した。積極・独立尺度の精緻化は、まず  $\alpha$  係数を算出し、 $\alpha$  係数を低める項目を削除して、最終的に各 5 項目にして内的整合性を高めた。その上で因子分析を行い、因子に重複のないことを確認した。

表 2 積極・独立尺度の因子分析結果

項 目	第 1 因子	第 2 因子
何ごととも率先してやっていこうとする	.858	-.036
何かをする時つい仕切ってしまう	.693	.168
人のしていることに口を挟んだり，手を出したりしてしまう	.585	.227
自分で企画して，実行することが多い	.542	.172
いつも新しいことをして，自分の力を試してみたい	.388	-.011
自由に生きることこそ最も幸せな生き方だ	.056	.652
好きなこと以外はしたくない	-.230	.639
自分は自分というスタンスを取っている	.252	.387
人に頼ろうとする人とは気が合わない	.234	.375
一人でいることが多いが，寂しくはない	.159	.326
因子寄与率（％）	30.2	17.1

表 3 研究で使⽤した尺度の平均と標準偏差

		人数	妄想	分裂質	分裂	反社会	境界	演技	自己愛	回避	依存	強迫	積極	独立
平均	全体	204	6.6	4.2	4.9	4.2	5.7	6.6	6.2	7.8	8.1	8.9	17.7	16.2
	男性	62	7.0	4.1	4.8	4.9	4.6	7.0	7.7	7.2	6.9	8.8	16.2	14.9
	女性	142	6.5	4.3	5.0	3.9	6.2	6.5	5.6	8.1	8.6	8.9	18.4	16.8
SD	全体	204	3.7	3.1	3.3	2.8	4.0	3.2	3.7	4	3.9	3.8	4.2	3.9
	男性	62	3.8	2.8	2.9	3.0	3.6	3.7	4.1	3.5	3.8	4.3	4.2	3.8
	女性	142	3.7	3.2	3.5	2.6	4.0	3.0	3.3	4.2	3.8	3.5	4.1	3.8

結 果

表 2 に積極・独立尺度の因子分析の結果を示す。主因子法で因子寄与率を求めたところ，第 1 因子が 32.1％であった。1 因子構造を持つことが考えられるが，第 2 因子までの累積寄与率が 47.3％であったので，因子数を 2 にすることが適切であると判断した。まず因子数を 2 にして主因子解を求め，バリマックス回転を行った。結果は初期設定の項目のとおり因子分析された。第 1 因子は積極性であり，第 2 因子は独立性であり，満足にいく整合性と因子構造を示した。

表 4 10 PesT 下位尺度の  $\alpha$  係数

	人数	妄想	分裂質	分裂	反社会	境界	演技	自己愛	回避	依存	強迫
全体	204	.697	.574	.654	.496	.746	.576	.704	.638	.725	.593
男性	62	.707	.574	.555	.524	.727	.672	.728	.564	.734	.682
女性	142	.701	.692	.691	.464	.745	.522	.655	.665	.707	.546

表 5 積極・独立尺度と 10 PesT 下位尺度の相関係数

	人数		妄想	分裂質	分裂	反社会	境界	演技	自己愛	回避	依存	強迫
全体	204	積極性	.126	-.108	.109	.179 <sup>a</sup>	-.074	.267 <sup>b</sup>	.302 <sup>c</sup>	-.159 <sup>a</sup>	-.391 <sup>c</sup>	-.012
		独立性	.358 <sup>c</sup>	.445 <sup>c</sup>	.412 <sup>c</sup>	.298 <sup>c</sup>	.074	.152 <sup>a</sup>	.356 <sup>c</sup>	.255 <sup>c</sup>	-.111	.293 <sup>c</sup>
男性	62	積極性	.237	-.007	.112	.273 <sup>a</sup>	.069	.489 <sup>c</sup>	.345 <sup>b</sup>	-.116	-.255 <sup>a</sup>	-.049
		独立性	.420 <sup>b</sup>	.540 <sup>c</sup>	.414 <sup>b</sup>	.239	.202	.134	.322 <sup>a</sup>	.245	-.013	.337 <sup>b</sup>
女性	142	積極性	.059	-.141	.121	.076	-.094	.131	.207 <sup>a</sup>	-.151	-.410 <sup>c</sup>	.011
		独立性	.326 <sup>c</sup>	.439 <sup>c</sup>	.434 <sup>c</sup>	.291 <sup>b</sup>	.059	.142	.319 <sup>c</sup>	.301 <sup>c</sup>	-.091	.289 <sup>b</sup>

a:  $p < .05$ , b:  $p < .01$ , c:  $p < .001$ 

表 3 は 10 PesT の男女別下位尺度の平均と標準偏差で、表 4 は  $\alpha$  係数の一覧である。下位尺度と積極・独立尺度の相関を表 5 に示す。積極性得点と正の相関を示したのは演技性、自己愛性であり、依存性は負の相関を示した。また独立性得点とは、妄想性、分裂質性、分裂性、反社会性、自己愛性、回避性、強迫性と正の相関が得られた。境界性はいずれの得点とも関係は認められなかった。

## 考 察

これまで人格障害心性は人格障害とは異なるものであり、心性は誰の中にも存在するという見解をとってきた。普段の生活では個性として、その心性は行動や態度に、問題視されない程度に顕れてくる。しかし危機的状況に遭遇した時に、その傾向が突出し、問題解決を図ろうとして、人格障害と称せられるような、周囲の人を巻き込む意外な行動をとることがある。ところが多くの人は、子どもの頃から時間をかけ、普段の生活の中で、些細な心性を表出して人

間関係を試しながら成長している。時には人の手を借りたり、助けられたり、時にはモデリングにより、ゆっくりと心性に応じた問題解決方略を身につけていくので、人格障害として問題化することはない。

ところが少子化によって、親が子に替わって問題解決をしてやるが増えるために、解決方略を学習していない人が増えてきていることが予測される。人格障害が増加傾向にあることは 2004 年 8 月 2 日付共同通信の次のような報道にも現れている。

18 歳以上の米国人の 7 人に 1 人以上が何らかの人格障害を抱えているとの初めての調査結果を、米国立衛生研究所が 2 日発表した。……調査に当たった研究者らは「人格障害はかなり一般的な問題といえ、効果的な予防策の検討が急務が」と指摘している。調査は 2001-02 年、全米から抽出した 18 歳以上の米国人 4 万 3000 千人に対し、調査員が面接で聞き回答を分析。(後略)

このようにわが国でもかなりの広がりを見せていると推測される。その原因が、人間関係を親によって代理構築してもらっていることに一因があるのではないかと考えられるのである。そのような人に、これまで経験したことがない危機的状況が訪れると、うまく切り抜けることができず、人格障害心性が問題行動化してしまう。この問題行動化を人格障害と呼ぶのである。

さらに人格障害として行動化しないまでも、人は自分にとって使いやすい人格障害心性を育てていく。特定の心性に組み合わされる問題解決方略も巧妙化されていき、ますますその心性は生活の中で支配的な領域となってくる。そして歳をとるほど行動や態度の「ほどよさ」が失われ、その心性は生活習慣化していき、人の言葉に耳を貸さない、かたくなに自分の生き方を守ろうとするようになる。このようなプロセスで生じる心性を明らかにするのが 10 PesT である。

境界性と積極・独立尺度間には唯一相関がなかった。境界性については Millon は循環性あるいは情動性人格 (Cycloid personality) と呼んでおり、積極性や独立性とは無関係と考えている。相関を有しないということは、小出仮説

での座標原点に位置していることを推測させる。逆に自己愛性は積極性、独立性両尺度間に相関が見られた。小出仮説や Millon 理論では行動パターンは消極的となっている。自己愛人格には 2 タイプあり、他者への迷惑な自己関与を特徴とするタイプと社会恐怖や引きこもりのような行動パターンを示すタイプが知られている。前者が積極的、後者が消極的というぶれがあるのかもしれない。

そして多くの人格障害心性は独立性と高い相関関係を有していることがわかった。つまり概ね人格障害心性の強い人は、一人であることが多いということであるが、人とは別の生活領域を持つことで人間関係の摩擦を避けようとしているのである。他者とは別の行動をとろうという方向に向かわせるのは、それだけ暮らし辛さを感じてからであろう。人と距離を置くという適応方略をとることによって適応しているのである。

妄想性や分裂質性、分裂性は人の中に居場所を求めない傾向が独立性として表れ、自己愛性や強迫性は自己主張の強さが独立性として表れているのであろう。不思議なのは対人希求性が強いはずの回避性も独立性との相関関係が高かったことである。これは回避性でさえ、行動的には独立したスタンスをとっていることを示しており、多分に孤立状況にあることを示しているのであろう。

若いころは小出や本研究の結果が示すように、多彩な人格障害心性を示すので、さまざまな方向に人格障害として行動化していく。その中核的人格障害が境界性人格障害といえるかもしれない。境界性尺度についてはこれまでのたびたびの研究（中澤, 2003, 2004, 2005）で、女性群、男性群とも、アルファ係数は常に .7 を超えており、尺度の内的整合性は青年層でも保たれている。このような結果は、境界性が早い年齢段階から、見捨てられ不安や依存など不安定な行動が個人の中のまとまりとして現れていることを示しており、個人の中で青年期から特徴立った行動パターンとして顕在化するということである。他にも妄想性、自己愛性、依存性のような若年層のうちから高い  $\alpha$  係数を示すパーソナリティもあり、早い時期から生活し辛い環境におかれていることが窺われる。

反省として、本研究のために作成した積極性・独立性尺度は、内的整合性を高めていく中で消極性や依存性を構成する項目が落ちてしまった。表 1 に示すように項目の内容からは、低得点は消極性や依存性を表すものではなく、不十分な質問紙を用意してしまい、不本意なものとなってしまった。

#### 参考文献

- 新宮一成, 加藤敏編・小出浩之, 高田知二著 2003 現代医療文化のなかの人格障害  
中山書店
- 中澤 清 2003 人格障害をモデルにしたパーソナリティ検査の尺度項目の作成  
人文論究 53, 4, 95-108.
- 中澤 清 2004 人格障害をモデルにしたパーソナリティ検査の作成 (1)——大学生  
のデータによる標準化の第一歩 日本パーソナリティ心理学会第 13 回大会論文  
集, 130-131.
- 中澤 清 2005 人格障害をモデルにしたパーソナリティ検査の作成 (2)——こころ  
の生活習慣病としての人格障害を考える 日本パーソナリティ心理学会第 14 回  
大会論文集, 57-58.
- Millon, T. 1969 *Modern psychopathology: A biosocial approach to maladaptive  
learning functioning*. Philadelphia: Saunders.
- Millon, T. 1990 *Toward a new personology: An evolutionary model*. New York:  
Wiley.
- Cloninger, C. R., Svrakic, D. M., & Przybeck, T. R. 1993 A psychobiological model  
of temperament and character. *Archives of General Psychiatry*, 50, 975-990.
- Widiger, T. A. 1985 Review of Millon Adolescent Personality Inventory. In J. V.  
Mitchell, Jr. (Ed.), *The Mental measurements yearbook* (Vol. 1, pp 979-  
981). Buros Institute of Mental Measurements of University of Nebraska.